

◇「おまけ」考

大槻伸次

本屋さんの天井から手提げバックなどの袋物が一杯吊り下げられているをよくみかける。そこで此の本屋さんは雑貨も扱うのかと思いきや、全くの見当違いで婦人向け雑誌の付録見本なのである。そこで雑誌の売り場に眼を落とせば、その付録が貼付された分厚い女性向けファッション誌が山積になっている。他、男性誌や性別を問わない雑誌も同様で、メガネ型の拡大鏡の付録雑誌もある。

最初に付録付き雑誌で攻勢（1999年）をかけたのは宝島社だそうで、ファッション誌全部を付録付にして部数を大きく伸ばしたという。それを追って大手出版社も毎号の様に付録をつけ始めた。そこで、各社が付録を重視し始めたのは、新たな読者の開拓、少子化で部数の低迷、消費者心理を突くなどあるようだ。そこで付録付きの雑誌が売れているという事は、読者が値上げを受け入れた事の証で、他誌との競争や価格を引き上げたい出版者側の思惑と、安くサンプルを配布したいブランド会社側の戦略が合わさって昨今のブームとなっていると考えられるそうだ。

ブランド会社側にしてみれば、安くサンプルを配布し市場動向を調査できるというメリットが有るからである。人間は同じ値段なら一個の商品を買うより、複数の商品の組み合わせを買う方が満足度が高くなることが解っているから、「おまけ」がついた雑誌の方が得をした気分になるようだ。人はつついそちらを選んでしまうという人の心理をうまく突いていると云えるだろう。

「おまけ」とは

「おまけ」の語源は「御負け」。店員が客との取引に負けて値を下げる行為を指す言葉だったが、後に商品以外の物品を追加する行為なども云うようになったようだ。

昔、富山の売薬さんたちは、薬を先に預けて置いて、使った分だけ代金をもらうという「先用後利・せんようこうり」のシステムで、全国に販路を拡大し、定期的に得意先を訪れ何らかの物品を追加して販売した事例があり、当時は「進物」、「土産物」と呼ばれていたようだ。その「進物」として配ったものが「おまけ」の始まりとも謂われている。その代表が「売薬版画」で、名所絵や役者芝居絵をはじめ、福神が出てくる目出度いもの、暦や食い合わせ表が盛り込まれた実用的な物まで多種多彩な版画が作られた。版画はカラー印刷物が珍しい時代は需要も高く、さらに配布する側にとっても軽量であったため江戸時代から、昭和初期まで長らく利用されたという。

明治後期になると、版画に代わって紙風船なども登場する。六角形に折りたたまれた紙に息を吹き込むと立方体の紙風船になる。我々が子供の頃（昭和20～30年代）、生家では富山の置き薬を常備していたので、半年に一回程度富山の薬屋さんが来た。

そこで、我々子供たちは紙風船などを貰うのが楽しみで、薬屋さんが帰るまでそこを離れなかった。他に、食物の「食べ合わせ表」などを置いて行ったので、常時見ら



れるようにお勝手に貼っておいたので、親に食べ合わせ表を見ては何々と一緒に何々を食べてはいけないなどと注意された。

カバヤ文庫

「おまけ」の一番の思い出はなんいってもカバヤ文庫だろう。カバヤ文庫はカバヤ製菓のキャラメルを買うとその中にカ・バ・ヤ・ブ・ン・コと印刷されたカードのどれか一枚入っていた。そのカードをカバヤブンコと全部揃えて駄菓子屋にもっていくと、世界名作文庫が一冊貰えた。

カバヤ文庫はA5版ほどの大きさに100ページほどで表紙がカラー印刷されたハードカバーの本で、本体の紙質は黒くザラザラした紙質でまことに粗末だったが、本の体裁は立派なものだった。

私は、カバヤ文庫が欲しくて駄菓子を買うときは必ずカバヤ製菓のキャラメルにした。(読むことはもち論だが全巻集めるのが楽しみだった。)しかし、キャラメルは一箱10円?(今日の100円以上?)買うたびに幸運に恵まれて全部違うカードが出ても6箱60円は必要である。しかし、当時の1カ月の小遣い銭はせいぜい50円くらいしか貰っていなかったので高価な買い物であった。やっとの思いで買っても同じカードばかりで、なかなか「カ・バ・ヤ・ブ・ン・コ」と揃わなかった。そこで、兄や友達とお互いに違うカードに交換しあったりした。ただ一つの救いは父は本好きであったのでカバヤ文庫騒ぎをして小遣いを注ぎ込んでも爆弾が落ちることは無かった。逆に本を読むのはいいことだと少しは援助をして貰うことができたのは幸いだった。

カバヤ文庫は、青少年向けの世界名作文庫で学校の図書館でも採用されたので読むには借りてくればよかったが、全巻集めて自分の手元に置きたいという気持ちは強かった。カバヤ文庫は、その後何年間続いたかはっきりと記憶に無いが最終的に兄と2人で集めた冊数は全30巻中20巻位しか集められなかった。

■前頁写真は富山の売薬さんの紙風船。■写真上はカバヤ製菓のカバヤ文庫(ネットから転載)。

食玩

お菓子についてくる「おまけ=景品」のことを「食玩」と言うそうで、全盛期だったのは2005年(平成17年)頃。お菓子を買うとおもちゃが付いてくるのが流行したが、ところが「おまけ」の筈のものがいまや大人を大いに魅了しているようだ。

車輪まで精巧に作られた戦車や初代の新幹線、達磨ストーブなどの懐かしいグッズ等のあれこれ、毛並みの感触が伝わってくる動物達など云々であるが、この当たり前とも云える形を作り出したのがお菓子メーカーの江崎グリコである。

「子どもたちにとって、食べることと遊ぶことは二大天職」と云われるが、そう考えた創業者の江崎利一は、1927(昭和2年)年から豆玩具を紙箱に入れたのが、いわゆ



る「おまけ」の始まりとも云われる。ところが、創業者は「おまけ」と呼んでいなかったそうで、江崎グリコの担当者はあくまでお菓子とおもちゃは対等で、今もおもちゃと呼んでいるそうだ。しかし、昨今おまけは子供たちだけのものだけでなく 1999 年発売され、精巧なフィギアが評判を呼んだチョコエッグ（フルタ製菓）は、今なお新シリーズが出て大人を魅了しているという。



更に「食玩」はコンビニエンスストアの一角を占拠し、限定品に長蛇の列ができるというのである。また、年間の売り上げが 600 億円とも言われている（2004 年）「食玩」になぜこんなに人気が集まるのだろうか。

おもちゃといえば子どもから大人まで、コンピューターゲームやそれを応用した高度な技術で作られたデジタル電子玩具全盛の時代である。なのに、このような昔流行したような「おまけ玩具」が脚光を浴びるなんてなんとも不思議に思わざるを得ない社会現象である。例えば、昭和の生活風景をフィギュアにしたタイムスリップグリコ。七輪で秋刀魚を焼く風景に、秋刀魚を狙う猫を配置するといった細かいこだわりのものなど、マニアはこれがかたまらないという。

コンビニで手に入る手軽さや買っても買っても欲しい「おまけ」が出てこない飢餓感。やっと巡り会えた時の喜びや魅力が、なんにもかもがせわしくハイテクなご時勢だからこそ昔ながらの玩具が醸し出すスローな時代の心の風景が癒しとなるのだろうか。ところが最近では、こんな玩具、いや玩具に限らず一つ二つと買うのではなくて全巻または全シリーズとをまとめ買いをしてしまう大人たちが大勢いるというから驚きだ。こんな買い物現象を“大人買い”というそうである。もっとも私自身もこういう大人買いのところがあるから解らないでもないが。

このような現象は、大人たちが貧しかった子供のころ欲しいものが買えず悔しい思いをしたことの裏返しではないかと専門家は分析している。

そこで、我々の子どもの頃のおもちゃ事情はどうだったかという、欲しいものはいっぱいあったが普通の日（ケの日）の小遣い銭はせいぜい 5 円で紙芝居 1 回見れば終わりだった（キャラメルが 1 個 1 円だった）。こんな雀の涙ほどの小遣い銭では欲しいものはなかなか買えなかった。それでも、正月（ハレの日）は雑誌や玩具を買ってくれた。そのときに買ってもらった雑誌などの選択は、内容よりおまけの付録に何がついているかが選ぶ基準だった。

戦後は極度の資源不足のため缶詰のブリキ缶を再利用したブリキ玩具、ベーゴマ、切手集めなどに夢中になった。また、子どもの頃の「食玩」やおまけについてはグリコのキャラメルの上部に小さなおまけを入れる箱が付いていてそこに風船ガムや野球選手のカード、メンコなど小学生向けの雑誌の付録にもよく立派なおまけがついてきた。雑誌の付録やお菓子のおまけで、今でも忘れられないものに裸電球を入れて使う厚紙製の幻燈器、ピンホールカメラ、厚紙に樹脂がコーティングされその面に音楽が

プレスされたソノラマレコード盤とレコード針の付いた簡単な手回し電蓄、双六、めんこ等いろいろあった。

現在、「食玩」と呼ばれるおまけ付きのお菓子ブームの中心は 30～40 代の男性という。玩具は時代や世相を反映する、玩具つきお菓子は江戸時代からすでにあったと江崎記念館（大阪市・江崎グリコ内）の赤木祥三さんは語る。最近では映像・音楽を届ける媒体となってきたという。

菓子メーカーのグリコは 2003 年、70～80 年代のヒット曲の CD をつけた「タイムスリップグリコ青春のメロディーチョコレート」を発売した。年末には、バンダイが DVD や年賀状作成ソフトつきのお菓子を売り出した。食玩は、映像や音楽、情報を届けるメディアに成長中というから驚きである。

■前頁写真は、少年雑誌の付録に付いたピンホールカメラで妹を撮影したもの。ピンホールカメラの欠点は真ん中が明るく周辺が暗くなってしまうことだった。

〔2021/5/20 記（以前に纏めたものの再編集）〕